様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５００７５０

研究課題名（和文）後天的身体障害者のスポーツへの社会化に寄与する他者に関する社会学的研究

研究課題名（英文）Sociological Study of the Others Contributing to Socialization into Sport of Disabled Persons

研究代表者
吉田　毅（YOSHIDA, Takeshi）

常葉大学・健康プロデュース学部・教授

研究者番号：７０２１０６９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,100,000円、（間接経費）　630,000円

研究成果の概要（和文）：後天的身体障害者がスポーツへの社会化を遂げていくプロセスで寄与する他者について、車椅子バスケットボール男女競技者および車椅子バスケットボールと車椅子マラソンの男子競技者の差異に着目し、インタビューで得た語りに基づき具象的レベルで解明することを試みた。ここで導出された他者は主に、スポーツに参加できる状態になるまでは、気を許せる他者、かけがえのない他者、癒す他者であった。その後スポーツに励むようになるまでは、スポーツ活動へ誘う他者と導く他者、それにスポーツ活動のサポート役というべき仲間であった。このうち誘う他者は、車椅子バスケットボール女子と車椅子マラソンでは数少なく上記のような差異が認められた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to identify the specific others contributing to socialization into sport of disabled persons, paying attention to the difference between male players and female ones of wheelchair basketball, and between male wheelchair basketball players and male wheelchair marathon runners. The author examined the contents of the narration recorded through the interviews with the subjects. The main others contributing to socialization into sport of them were as follows: First, until they conquered their disabilities, they were close othes who gave emotional supports to them, irreplaceable others who were the sources of their drives to conquer their severe difficulties, and healing others. Until they later applied themselves to the sport activities, they were inviting others and leading others who attracted them to the sport activities, and associates who supported their sport activities. Among them, the above differences of the inviting others were confirmed.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、スポーツ社会学

キーワード：アダプテッドスポーツ　スポーツへの社会化　後天的身体障害者　具象的他者　車椅子バスケットボール　車椅子マラソン　性差・種目特性差　キャリア形成

１．研究開始当初の背景

後天的身体障害者（以下「後障者」と略す）においてスポーツは、リハビリはもとより自立や社会参加、あるいは楽しみやＱＯＬ（生活・人生の質）の向上等のために非常に有効であり、今後ますます障害者スポーツを振興していくことは重要である。わが国では1990年代後半から、そのための手がかりを得ようとする、身体障害者の「スポーツへの社会化（スポーツに定期的、継続的に参加するようになること）」（Kenyon and McPherson、1973）の要因等に着目した研究が特に車椅子バスケットボール（以下「バスケ」と略す）競技者を対象に行われてきた（藤田、1998；吉田、2007、2009）。

そうした中、後障者を対象とした研究（吉田、2007、2009）では、対象者においては受傷した後にスポーツに参加できる状態になるまでが容易ではなく、そうしたいわばスポーツへの社会化の準備局面が認められ、基本的にはこの局面を切り抜けた上で実際にスポーツに参加する主要局面へ至ったこと、それにいずれの局面でも特に他者の関わりあいが重要であったことが分かった。しかしながら、上記の研究で対象とされた事例は数少なく、男子のバスケ競技者に留まる。それゆえ、他者に着目するとともに性差や種目特性差にも留意し研究を重ねていくことが求められる。その際に注意すべきは、上記の研究で見出された他者が、従来のスポーツへの社会化研究で偏に着目されてきた「重要な他者（主として心理的な意味において高い重要性を付与された他者）」（後藤、1988）に限るわけではなく、偶然的に関わった何気ない他者というケースもあったこと、また、重要な他者の範疇に入るケースでも各々の意味は一様でなかったことである。このことから、後障者のスポーツへの社会化に寄与する他者は多様性に富んでおり、そうした抽象度の高い概念で括ってしまうと各々の重要性の程度や具体的な意味が把握し難くなることが示唆される。そのため、他者を具象的に捉えることが求められる。

２．研究の目的

(1)目的

本研究の目的は、後障者が受傷してからスポーツへの社会化を遂げていくプロセス（上記の各局面）では、どのような他者が寄与しているのかについて解明することである。それにあたり、他者について改めてより具象的なレベルで捉え、概念化、類型化を行うことを試みる。対象は、スポーツへの社会化を遂げたとみられる後障者に当たる競技者とする。具体的には次の3点について検討する。

①後障者のスポーツへの社会化に寄与する他者の性差―バスケ男女競技者を対象とする。

②後障者のスポーツへの社会化に寄与する他者の種目特性差―バスケ男子競技者と陸上競技男子競技者（他者関係性の濃い団体種目と薄い個人種目）を対象とする。

③後障者のスポーツへの社会化プロセスにおける他者の意味―上記①②に関して得られた知見を基に、後障者のスポーツへの社会化プロセスにおける他者の意味と要点について総合的に考察する。

(2)特色・独創性

本研究の特色・独創性は次の通りである。

①他者に関する新たな概念・類型を見出す―こうした着眼点は従来のスポーツへの社会化研究にはみられない。

②スポーツへの社会化を2局面で捉える―スポーツへの社会化を準備局面と主要局面とで捉える。こうした着眼点は、スポーツ参加の主要局面ばかりに着目してきた健常者のスポーツへの社会化研究にも、それ以前の生活をも分析の射程に入れることでより説得力のある深い分析が可能になることを示唆し得るであろう。

③個々の語りに基づく方法―インタビュー法といった質的方法を用い、個々の語りを基に検討する。従来のスポーツへの社会化研究では量的方法を用いるものが主流であった。

④身体障害者・後天的身体障害者を対象とする―スポーツへの社会化に関する研究では未だに身体障害者を対象としたものは数少ない。

⑤身体障害者を競技者と捉える―競技力向上を主たる目的としてスポーツに励む身体障害者は少なくないにも拘わらず、先行研究では身体障害者を競技者と捉えたものはあまりない。

３．研究の方法

本研究ではインタビュー法（半構造化インタビュー法）を用い、対象者の語りを基に検討する。他者の具象的意味は基本的に対象者の語りとして表出されるから、ここではこの方法が妥当といえる。調査対象者は前述のように、スポーツへの社会化を遂げたとみられる後障者として、団体種目のバスケと個人種目の車椅子マラソン（以下「マラソン」と略す）の競技者とする。各々で地域的バランスを考慮に入れ、西日本在住者と東日本在住者をほぼ同数とする。インタビューでは時間軸に即して、生い立ちから

受傷前まで、受傷の様子、その後に立ち直っていく様子、スポーツに参加・継続していく様子について、各段階での他者関係性に留意しながら尋ねる。回想による誤謬を防ぐためと分厚く詳細なデータを収集するために、インタビューは基本的に個々に対し 2 回に分けて実施する。各年度の手続きは概ね次の通りである。

＜平成 23 年度＞

研究目的①～③の前提となるバスケ男子競技者を対象に調査・分析を行う。

＜平成 24 年度＞

研究目的①③に関わるバスケ女子競技者を対象に調査を行い、前年度における男子の知見を交え研究目的①について検討する。

＜平成 25 年度＞

マラソン男子競技者を対象に調査を行い、23 年度におけるバスケ男子の知見を交え研究目的②について、更に研究目的③について検討する。

４．研究成果

(1)研究目的①について

まずバスケ男子、次にバスケ女子に関する結果を示した上で、後障者のスポーツへの社会化に寄与する他者の性差を述べる。

①バスケ男子

対象者は下記のように、西日本は「清水M・S・T」（兵庫県）の 4 名（A氏、B氏、C氏、D氏）、東日本は「埼玉ライオンズ」（埼玉県）の 3 名（E氏、F氏、G氏）と「NO　EXCUSE」（東京都）の１名（H氏）であった。

・A氏：1970 年 10 月生、16 歳時（1987 年 9 月）にバイク事故で脊髄損傷

・B氏：1973 年 3 月生、24 歳時（1997 年春）に転落で脊髄損傷

・C氏：1984 年 8 月生、16 歳時（2001 年春）にバイク事故で脊髄損傷

・D氏：1985 年 6 月生、20 歳時（2006 年 2 月）に車にひかれ脊髄損傷

・E氏：1988 年 9 月生、18 歳時（2007 年 3 月）にバイク事故で両足切断

・F氏：1970 年 3 月生、24 歳時（1994 年 10 月）にバイク事故で脊髄損傷

・G氏：1976 年 2 月生、15 歳時（1992 年 2 月）に転落で脊髄損傷

・H氏：1971 年 4 月生、16 歳時（1988 年 1 月）に骨肉腫で片足切断

入院、告知、そしてリハビリの段階に当たる準備局面では、A氏の「ありえへんは、何で自分が…世界一不幸や」との言が物語るように、各々のショックは大きい状態にあった。こうした状況を切り抜けるのに寄与した他者として、皆が家族（F氏は彼女も含む）を挙げた。A氏は「（自らが死ななかったことだけでも喜ぶ）父の一言がずっと支えになった」（F氏も同様）と、B氏は「母がベッドのそばにいてくれるだけで支えになった」（D氏も同様）と語る。他にも、家族が「文句をいえる」（C氏）、あるいは「弱音をはける」（E氏）存在であり、ショックを軽減するのに寄与したとの語りが得られた。あまり気を使う必要のない家族のような存在は情緒的な支えとして貴重なものとみられる。この種の他者は＜気を許せる他者＞と呼び得るだろう。ただし、H氏の場合は特に母がそれ以上の存在であった。彼は骨肉腫を患い長きに亘って闘病生活を送ったが、その終盤には母もがんの再発で入院した。H氏は母の重篤な病状をみた際の自身の思いを次のように語る。

「自転車も乗れない母親が…（H氏の看病に通う便宜上）車の免許を取ろうとかっていって…だけど、車の運転なんて泣いちゃうくらい怖い、…仮免許に落ちてですね、差し入れ持っていきながら先生にこう、おべっかを使いながら何とか通してもらおうみたいなことをして。…何とか取って…僕を献身的に支えてくれた母親が…死にそうだということに対して、男として、お前はどうなんだと…僕が助かれば、もしかしたら母親が助かるかもしれない…そんな感情に辿りついて、もの凄く力強くなったというか。…どんな恐怖も、全部乗り越える、覚悟みたいなエネルギーがウワッと湧いてきたんです」。

H氏において母は、困難を克服するために必要な気力の源泉となった。こうした他者は先行研究（吉田、2012）でも認められた＜かけがえのない他者＞と呼び得る。更にH氏は、看護師が「癒しの存在」であったと、医師が「勇気と力を与えてくれた」という。文字通り、前者は＜癒す他者＞と、後者は＜力づける他者＞と呼び得る。B氏、D氏、E氏においても看護師やＰＴが＜癒す他者＞であったようである。他にも友人の存在も大きかったとの語りが得られた。友人についてA氏は「遊びに連れてってくれて…気が紛れた」と、B氏は「励みになる情報を持って来てくれた」（F氏も同様）と、D氏は「来てくれただけで嬉しかった」（G氏も同様）という。こうした友人も各々にとって情緒的な癒しとなったから＜癒す他者＞と呼び得る。他方、＜力づける他者＞は本研究の対象者の中でH氏だけに見出されたものであった。

次に主要局面についてみていく。7 名はバスケ関係者から誘われバスケに参加した。誘った

他者は、文字通り＜誘う他者＞と呼ぶより他はない。A氏が「活きのいい若いのが入ってくると（勧誘に）来る」というように、彼らが入院した病院や入所したリハビリ施設と、地元のバスケクラブとが密接につながっており、各々の周辺にはいわば勧誘ネットワークがあったとみられる。他方でC氏は、退院後3年あまり経った後に自らインターネットで調べ、バスケに関心を持ち地元クラブに入った。

彼らは間もなく、バスケそれ自体の魅力（面白さ等）と共に他者によって惹きこまれ、スムーズにバスケへの社会化を遂げたとみられる。ここで寄与した他者は、「師匠」（A氏、B氏、C氏）、「先生」（D氏）、「兄貴」（E氏）、「モデル」（F氏）と表現される、親身になってリードしてくれる先輩、あるいは意図的にではないもののプレーで惹きつける先輩（C氏、G氏、H氏）であった。前者は先行研究（吉田，2012）で見出された＜導く他者＞、つまり困難克服の方向を定めるべく能動的に配慮を施してくれる他者と捉え得る。後者も各々をバスケに導いたのは確かであり、上記とは異なる意味での＜導く他者＞と捉えるべきだろう。また、寄与した他の他者として、所属クラブで共に練習に励んだり遊んだりした＜仲間＞（B氏、C氏、G氏、H氏）も挙げられた。これも先行研究（吉田、2012）で見出されており、当該活動に共に取り組むサポート役というべき他者とみられる。

②バスケ女子

次にバスケ女子についてみていく。対象者は下記のように、西日本は「Ｃａｔｓ」（愛知県）の3名（Ｉ氏、Ｊ氏、K氏）と「カクテル」（京都府）の1名（L氏）、東日本は「エルフィン」（東京都）の2名（M氏、N氏）と「ＷＩＮＧ」（神奈川県）の1名（O氏）であった。

・Ｉ氏：1985年7月生、16歳時（2001年8月）に医療ミスで片足麻痺
・Ｊ氏：1981年4月生、15歳時（1997年3月）からの内臓疾患治療の副作用で下肢障害
・K氏：1971年7月生、28歳時（1999年9月）に転落で脊髄損傷
・L氏：1977年8月生、19歳時（1997年2月）に自動車事故で脊髄損傷
・M氏：1982年12月生、25歳時（2008年5月）にスノーボード事故で脊髄損傷
・N氏：1971年4月生、15歳時（1986年6月）に脊髄腫瘍
・O氏：1975年1月生、21歳時（1996年3月）にスノーボード事故で脊髄損傷

まず、ショックの大きい状態にある準備局面を乗り越えるのに寄与した他者として彼女らが挙げたのは、O氏とL氏以外は母であった。母について、N氏は「我がままいったり当たれる」と、Ｊ氏は「絆を感じ…支えになった」という。母子家庭のO氏の場合は、幼少期から「厳しいだけ」であった母が仕事のためなかなか病院へ来ることが出来なかった。その代わりに「こんな母がいたらよかった」と思えるような看護師と、世話をしてくれた彼氏が「支え」となった。母が病弱であったL氏は「毎日来てくれる父親の姿をみて、生きなあかん」と思ったという。こうした情緒的な支えとなる他者は、前述のように＜気を許せる他者＞と呼び得る。

また、男子H氏のようなケースはK氏にも該当する。K氏にとって母は、「帰れと当たってばかりいたんやけど、毎日のように励ましてくれた…元気な姿を母に見せたいと思ってリハビリしました」というように、情緒的な支えに留まらない＜かけがえのない他者＞であったとみてよい。他方でL氏は、友人（1名は事故直後に遠方から訪れ「頑張れ」と激励してくれ、もう1名は3日おきぐらいに手紙を送ってくれた）により「安心感」を覚え、「親身」に話を聞いてくれた看護師により不安が和らいだという。いずれも＜癒す他者＞の類と捉えられる。

次に主要局面についてみていく。バスケに参加する契機については、Ｊ氏、L氏、O氏はバスケ関係者から誘われ、Ｉ氏、K氏、N氏は自発的に取り組む活動を求める中でバスケに出会った。前者のうち2名の場合は男子が＜誘う他者＞であった。また、M氏の場合は、バスケの「コミュニティ」が入所していたリハビリ施設にあったためバスケを始めた。

その後、彼女らがバスケを継続していく様子は一様ではなかった。O氏は何度も誘われたことで「断るため」に仕方なくバスケに参加したが、案の定「かっこよくない」と思った。L氏は先に取り組んでいたマラソンへの関心が強く、暫くはそれを優先した。彼女らがバスケに励むようになったのはやはり他者による。O氏は当初より男子クラブで活動したが、そこでベテラン選手からバスケを手ほどきされながら「2人でみっちり練習した」という。練習後にはメンバーと飲食を共にする中で彼から生活面に関する有効な情報も得た。「厳しくもあり優しくもある」彼を、O氏は「心の師匠」と表現する。Ｌ氏は先輩女子選手から大きな影響を受けた。氏はバスケに限らず生活面でもいろいろと「面倒をみてくれた」という。こうした他者は前述

した＜導く他者＞と呼び得る。Ｊ氏とK氏においてもこの種の他者が認めらたが、それは彼氏であった。他にもＩ氏の場合は先輩男子選手が、N氏の場合は先輩女子選手が＜導く他者＞となった。他方でM氏の場合は、リハビリ施設に同時期に入所していた男子選手 2 名と仲良くなり、練習に限らず飲食を共にしたことが貴重であったという。彼らは＜仲間＞と捉え得る。

③性差

以上から、後障者のスポーツ（バスケ）への社会化に寄与する他者の性差について、本研究で得られた知見は次のようにまとめられる。

準備局面における他者は特に性差が認められなかった。誰もがショックの大きい状態にあるこの局面を切り抜けるのに寄与した他者としては、男女とも主に次の他者が挙げられる。まず、情緒的な支えとなる気を使う必要のない家族のような存在、つまり＜気を許せる他者＞である。また、障害による困難を克服するための気力の源泉、換言すればこの人のためにも頑張らねばと思わせてくれるような代わりなき他者である＜かけがえのない他者＞、ならびに情緒的に癒してくれる友人等の＜癒す他者＞である。

一方、主要局面における他者は性差が認められた。ここで認められた他者は文字通り、個々をバスケに誘う＜誘う他者＞、その後にバスケへと惹きこむ＜導く他者＞と＜仲間＞であった。こうした点だけをみれば特に性差はないのであるが、＜誘う他者＞と出会った者は、男子ではほとんどであったのに対し女子では半数に満たなかった。また、女子における＜誘う他者＞は 3 名中 2 名が男子であった。こうした差異は、男女におけるバスケの普及度の差を物語っているのであろう。男子のバスケは一定の普及を遂げ、そこでは勧誘ネットワークが機能しており時には女子がそれにかかることもあるのではないかと考えられる。女子の場合は勧誘ネットワークが機能するほど普及しておらず、自発的に取り組む活動を求めないとバスケに出会う可能性は低いのであろう。こうした普及度の差は、＜導く他者＞と＜仲間＞からもみて取れる。女子における＜導く他者＞は 6 名中 4 名が男子であり、1 名が挙げた＜仲間＞も男子であった。現状のバスケ界では、女子は男子に依存関係にあるとみられる。

(2)研究目的②③について

次にマラソン男子の結果を示し、後障者のスポーツへの社会化に寄与する他者の種目特性差およびこのプロセスにおける他者の意味と要点について述べる。

①マラソン男子

対象者は下記のように、西日本ではＰ氏、Ｑ氏、R氏の 3 名、東日本ではＳ氏、T氏、U氏、V氏の 4 名である。

・Ｐ氏：1973 年 2 月生、29 歳時（2002 年 5 月）にバイク事故で脊髄損傷
・Q氏：1984 年 3 月生、20 歳時（2004 年 4 月）に自動車事故で脊髄損傷
・R氏：1950 年 9 月生、19 歳時（1970 年 1 月）にバイク事故で脊髄損傷
・Ｓ氏：1968 年 1 月生、23 歳時（1991 年 7 月）に転落で脊髄損傷
・T氏：1964 年 9 月生、16 歳時（1981 年 5 月）に転落で脊髄損傷
・U氏：1959 年 1 月生、30 歳時（1989 年 2 月）に転落で脊髄損傷
・V氏：1971 年・月生、35 歳時（2006 年 12 月）に転落で脊髄損傷

まず準備局面についてみてみる。T氏は受傷後、暫く「頭が真っ白の状態で何も考えられませんでした。どう生きていったらいいのか全然分かりませんでした」という。こうした絶望的な状況を乗り越えるのに寄与した他者として皆が挙げたのは、やはり家族（Q氏は彼女も含む）であった。事故直後に両親が離婚し、退院後は父と住むことになったＰ氏は「父しか頼れなかった」が、父が何でもやってくれ「支えられた」という。T氏は受傷した鬱憤を晴らそうと母や弟に当たり続けたが、それでも「母が毎日つきそってくれて励みになった」。U氏の場合は褥瘡に苛まれた数ヶ月間、妻が育児と仕事で多忙にも拘わらず毎日来てくれ、それが「安心感」につながった。Q氏は「自分のことを分かってくれてる彼女」が「毎日来て支えてくれ、…いてるだけでホッとした」という。彼らにおいても、こうした情緒的な支えとなる＜気を許せる他者＞が寄与したとみてよい。

V氏の場合は妻が幼子（3 名）を連れて遠方にある自宅から頻繁に来てくれた。それをみる度に「子どものために頑張ろう」との思いが強くなっていきリハビリに励んだという。V氏にとって幼子は前述のような＜かけがえのない他者＞であったとみてよい。また、R氏は世話になった看護師全員に「癒された」と、見舞いに来てくれた友人によって「気が紛れた」という。Ｐ氏、Q氏、T氏、V氏も友人あるいは職場の同僚が来てくれたことで気持ちが和らいだという。彼らにおいてはこうした＜癒す他者＞も寄

与したとみられる。

次に主要局面についてみていく。初めからマラソンに参加したのはＰ氏、Ｓ氏、Ｖ氏の３名である。他４名はマラソンに参加する以前は別の種目に取り組んでいた（Ｑ氏はバスケ、Ｒ氏とＴ氏はスラローム等、Ｕ氏は車椅子テニス）。＜誘う他者＞によってマラソンに参加した者は３ 名であった。Ｔ氏とＵ氏は別の種目に取り組んでいる最中に、Ｔ氏はリハビリ指導者にＵ氏はマラソン関係者に誘われた。またＶ氏は入院中、たまたま同時期に入院していたマラソン関係者に「お前もやれ」と強引に誘われたという。他４名はマラソンをメディアあるいは生で見たことを契機に、Ｐ氏が「かっこいい、やってみたいと思った」というようにマラソンに関心を持ち、自発的にマラソン界へアプローチした。Ｐ氏はリハビリ施設のスタッフを通じて、Ｑ氏はインターネットを通じてマラソン関係者に連絡した。Ｓ氏は新聞に出ていたマラソン選手に手紙を送った。

彼らはその後、マラソン関係者の世話（マラソン用車椅子を手配してくれたり実際に走る段取りをつけてくれたり）によりマラソンに参加するに至った。こうした他者も＜導く他者＞の範疇で捉えることが妥当であろう。更に、彼らがマラソン活動を継続していくのに寄与したのは「先生」（Ｐ氏）、「よくしてくれる人…レースのことも生活のこともアドバイスしてくれる人」（Ｑ氏）、「あこがれ…助言ももらえる人」（Ｔ氏）、「面倒見のいい先輩」（Ｖ氏）といった＜導く他者＞、またＳ氏、Ｔ氏、Ｕ氏の場合はマラソンに限らず飲食を共にして生活面の情報源ともなった＜仲間＞であった。

②種目特性差および他者の意味と要点

他者の種目特性差をみると、準備局面についてはマラソンでも＜気を許せる他者＞、＜癒す他者＞、それに＜かけがえのない他者＞が見出され、種目特性差は認められなかった。主要局面については、マラソンでは＜誘う他者＞が当該種目に参加する契機となった者が約半数であり、この点は性差と同様に種目特性差が認められた。一定の普及を遂げた男子のバスケに比して、マラソンは男子でも女子のバスケと同様、普及度と共に勧誘ネットワークの機能は低いレベルにあるとみられる。その他の他者についてはさして種目特性差は認められなかった。マラソンは個人種目とはいえ団体種目に比して他者関係性が薄いわけではなく、一旦参加した者はマラソン界における＜導く他者＞や＜仲間＞といった他者との関係性の下で競技活動に取り組むようになっているとみられる。

後障者のスポーツへの社会化プロセスにおける他者の意味と要点は、既にみてきた通りであり繰り返すまでもないだろう。前述のように、各他者は各局面、各段階で各々なりの意味を持って後障者のスポーツへの社会化に寄与し得る重要な存在といえる。それらはいずれも重要な他者といった既存の概念で括ることはできるが、本研究ではそうした抽象度の高い概念を問題視し、他者の具象性に留意したことで意味の異なる複数の他者を導出することができた。こうした着眼点と知見は、上記プロセスではどのような他者が重要であるかを明示したという点で実践的に有意義であるばかりか、今後の研究に対し方法論等に関わる有効な示唆を与え得ると共に独創的なアイデアを喚起し得るものとみられ学術的にも意義深いといえよう。

また、性差と種目特性差について見出された＜誘う他者＞をめぐる点に着目すると、障害者スポーツ振興のポイントもみえてくる。女子のバスケやマラソンのような普及度と共に勧誘ネットワークの機能が低いレベルにあるとみられる種目を振興していくには＜誘う他者＞に準ずる機能を拡大していくことが求められよう。後障者に対し各種目の情報の周知を図っていくことなどが一例として挙げられる。本研究ではこうした実践的に有効な知見も得られた。

今後は対象者、対象種目を増やすと共に各他者の概念についても検討を重ねていくことが重要と考えられる。なお、引き続き本研究のデータに関する分析を深めつつ論文を著していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①吉田　毅、中途身体障害者のスポーツへの社会化に寄与する他者に関する社会学的研究：骨肉腫を克服した元車椅子バスケットボール選手の語りから、体育学研究、査読有、59 巻 2 号、2014（掲載予定）

〔学会発表〕（計１件）

①吉田　毅、今日におけるアスリートのキャリア問題、日本スポーツ社会学会第 23 回大会学生フォーラムシンポジウム、2014、北海道大学

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　毅（YOSHIDA, Takeshi）
常葉大学・健康プロデュース学部・教授
研究者番号：７０２１０６９８